九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『天学初函大意書』における『畸人十篇』

柴田，篤
九州大学大学院人文科学研究院

https://doi.org/10.15017/1498405

出版情報：哲學年報. 74, pp.1-16, 2015-03-13. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院人文科学研究院
『哲学年報』第七十四輯抜刷
二〇一五年　三　月　発　行

『天学初函大意書』における『畸人十篇』

柴田　篤

『天学初函大意書』における『畸人十篇』

柴田　篤

はじめに

『畸人十篇』は、明代末期に中国で活躍したイタリア人イエズス会士のマテオ・リッチ（一五五二～一六一〇）が、中国名の利瑪竇として一六〇八年に北京で出版した書物である。彼の主著『天主実義』は、「中士」と「西士」との対話形式によって、天主教（カトリック・キリスト教）に関する議論を展開したものである。[1] これに対して『畸人十篇』は、マテオ・リッチが実際に中国人との間で交わした対話を記録した書物である。[2] この両書はその後の中国・朝鮮・日本に様々な影響を与えた。本稿では、『畸人十篇』の日本への思想的影響を考えるために、江戸時代に書かれた『天学初函大意書』を取り上げることにする。

一　『畸人十篇』の日本への影響

『畸人十篇』は、一六〇八（万暦三六）年に北京で初刻された後、翌一六〇九（万暦三七）年に南京と江西（南昌か）で重刻されている。[3] また、一六一一（万暦三九）年には再び南京において、王汝淳が校訂して出版される。その後、一六二九（崇禎二）年に李之藻（一五六五～一六三〇）が杭州（浙江）で『天学初函』を編纂・出版した際にも収載される。[4] その版本には、「重刻畸人十篇　利瑪竇述　後学汪汝淳較梓」と記されているから、汪汝

淳校訂本を用いたと思われる。さらに、おそらく一六三〇年代初頭には、張瑞圖（一五七六～一六四一）によって福建で校訂・出版されている。このように、『畸人十篇』は明末において、一六〇八年の北京初刻、一六〇九年の南京及び江西重刻、一六一一年の南京重刻、一六二九年の杭州『天学初函』本、さらに一六三〇年代の福建重刻と、少なくとも六回は出版されたと考えられる。[5] では、こうした版本は日本にもたらされたのであろうか。

江戸初期、林羅山（名は信勝、一五八三～一六五七）が出版間もない『天主実義』を読み、日本人イエズス会士である不干斎ファビアンと論争したことは、その著「排耶蘇」でよく知られるところである。[6] では、『畸人十篇』はどうであったろうか。江戸時代の著名な学者において、『畸人十篇』が読まれていたという少なくとも二つの証拠を挙げることができる。一人は古文辞学の荻生徂徠（名は双松、一六六六～一七二八）であり、もう一人は国学者の平田篤胤（一七七六～一八四三）である。

徂徠に関しては、江戸後期の狂歌・洒落本作家であり博学で名高い大田南畝（一七四九～一八二三）の随見随聞筆録である『一語一言』の中に「徂徠畸人跋」という一篇がある。同書の巻末書き入れに「享和改元二月の比に終る」とあることから、おそらく寛政（一七八九～一八〇〇）の後半から享和元年（一八〇一）までの間に書かれたものと見られる。[7] 南畝が書き写したこの跋文は、徂徠が享保一一年（一七二六）七月九日に著したものとされる。享保の頃に『畸人十篇』が尾張藩の重臣（津田太夫）の手に入り、徂徠がこれを読み、それがキリシタンの教えを記した書物であるということを知ったというものである。[8] 一方、平田篤胤と『畸人十篇』の関係に関しては、日本の研究者によって夙に指摘されてきたことである。[9] すなわち、篤胤はマテオ・リッチの『天主実義』や『畸人十篇』、さらに龐迪我の『七克』などを下敷きにして、文化三年（一八〇六）に未定稿本『本教外篇』を著している。

以上のように、江戸中期の知識人によって『畸人十篇』は確実に読まれていたのである。しかし、言うまでも

なくこの時代はキリシタンは禁教であり、これに関する書物は禁書であった。明末の中国で盛んに出版された天主教関係書籍の日本輸入は禁止されていた。最初の禁書令は、寛永七年（一六三〇）に出される。この時の禁書指定の対象となった書物の中に、「欧羅巴人利瑪竇等之作三拾弐種之書」が含まれており、もちろん『畸人十篇』もその中に数えられている。以後、『天主実義』や『畸人十篇』を含む『天学初函』は、禁書として厳格な取り調べの対象となった。享保五年（一七二〇）に将軍吉宗によって出された緩書令においても、目的は西洋暦法の輸入にあったわけで、『天学初函』器篇所収の天文・暦法・測量・数学関係の書物が緩和の対象となっただけで、天主教関係書籍は依然として輸入厳禁であった。

二　『天学初函大意書』について

『畸人十篇』を含む『天学初函』は、江戸時代寛永年間以降、禁書指定の対象となり、輸入は厳禁であった。そうした中で、明和八年（一七七一）に長崎に入港した「卯九番唐船」が運んできた書物の中から『天学初函』が発見される。この時に書物改役によって記された『天学初函大意書』の写しが、今日九州大学附属図書館と東北大学附属図書館狩野文庫に所蔵されている。江戸期の禁書に関しては、伊藤多三郎氏の「禁書の研究」（『歴史地理』、一九三六）、海老沢有道氏の「禁書令に関する諸問題」（『増訂切支丹史の研究』新人物往来社、一九七一）、大庭脩氏の『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、一九六七）などに詳しい。本節では、大庭脩氏の『江戸時代における日中秘話』（東方書店、一九八〇）の第二章「禁書発見」及び第三章「書物改」によって、『天学初函大意書』について概略を見た上で、その内容について検討していくことにする。(10)

九州大学附属図書館所蔵本は、共表紙、袋綴、二十三丁一冊で、表紙には、中央二行に「卯九番唐船持渡商売

書物之内」、「天学初函大意書」とあり、右肩三行に「明和八卯年」、「新見加賀守様御在勤之節言」、「上」とあり、左端に「卯三月」とある。新見加賀守は、明和二年（一七六五）一月から安永三年（一七七四）十一月まで長崎奉行の座にあった新見正栄のことである。また、この『大意書』の末尾に「向井斎宮」とあるのは、当時、書物改役であった向井兼美のことである。兼美の祖は、向井元升（一六〇九～一六七七）である。元升は長崎で天文や儒医の道を学んだ後、聖堂を建て祭酒となり、私塾を開いて儒学を講じた人物であるが、寛永一六年（一六三九）には書物改役に就いている。元升の三男が向井元成で、延宝八年（一六八〇）に書物改役となり、貞享二年（一六八五）に「十五番南京船」の持ち渡り書の中から、明末入華イエズス会士の傅汎際（P.Franciscus Furtado）が著した『寰有詮』を発見し、一躍有名になる。以後、代々向井家が書物改役を世襲することになる。元成の養子の兼般（字は元仲）の跡を継いだのが、子の兼美（字は斎宮）である。

書物改役は、唐船が持ち渡った書物について、その内容を調査吟味して、「大意書」を作成する。特に禁書に指定されたもの、あるいは疑わしい内容や御禁制の語句などがあった場合には、一点ずつの大意書が作られる。大意書は内容を吟味した上で出される報告書であるから、書籍解題の性格も持っていた。向井斎宮が記した『天学初函大意書』は、当時における『天学初函』の提要とも言えるものであった。最初に全体の種目（書目）と全体的報告が記されている。

卯九番唐船持渡

一　天學初函　壹部二套十六本

種目

西學凡　一巻 葉数十七張

唐景教碑　一巻　葉数十六張
畸人十篇　二巻　葉数二巻合八十六張
交友論　一巻　葉数十一張
二十五言　一巻　葉数十張
辯学遺牘　一巻　葉数二十六張
七克　七巻　葉数七巻合二百二張
霊言蠡勺　二巻　葉数二巻合六十八張
圜容較義　一巻　葉数二十四張
測量法義　一巻　葉数二十四張
測量法義異同　一巻　葉数五張
勾股義　一巻　葉数二十二張
泰西水法　六巻　葉数六巻合七十九張
渾蓋通憲図説　二巻　葉数二巻合八十七張
幾何原本　四巻　葉数四巻合百五十張
簡平儀　一巻　葉数二十一張
同文算指前編　二巻　葉数二巻合六十二張
同文算指後編　八巻　葉数八巻合二百五十九張
以上十八種

内

圜容較義　天文之書　欧邏巴　利瑪竇　授　浙西　李之藻　演

渾蓋通憲圖説　天文之書　浙西　李之藻　演　漳南　鄭懐魁　訂

測量法義　造器論景測量法十五首ヲ列子三数算法ヲ附ス　欧邏巴　利瑪竇　口訳　呉淞　徐光啓　筆受

測量法義異同　前書之異同ヲ論ス　呉淞　徐光啓　譔

簡平儀　暦法之書　欧邏巴　熊三拔　撰説　呉淞　徐光啓　箚記

勾股義　算法之書　呉淞　徐光啓　譔

幾何原本　算法之書　欧邏巴　利瑪竇　口訳　呉淞　徐光啓　筆受

同文算指前編　算法之書　欧邏巴　利瑪竇　授　浙西　李之藻　演

同文算指後編　算法之書　欧邏巴　利瑪竇　授　浙西　李之藻　演

交友論　朋友之交誼ヲ論ス　欧邏巴　利瑪竇　譔

享保五子年ヨリ西洋人著述ノ書タリトモ邪法教化之儀サヘ不記書ハ御構無之旨被仰出其以来右之十種追々

持渡リ邪法教化之文曽テ無御座ニ付キ商売ニ出申候フ書ニテ御座候

ここで取り上げられている『天学初函』は、二套（秩）で併せて十六本（冊）であった。問題はその中味である。『大意書』では、『西学凡』から『同文算指後編』まで十八種の書名を掲げている。そもそも『天学初函』は、理編と器編とに分けられる。編者である李之藻の「刻天学初函題辞」には「各十種」とある。各編所収書の題名のみを列記すれば次の通りである。理編は、西学凡、景教流行中国碑頌并序、畸人十篇、交友論、二十五言、天主実義、弁学遺牘、七克、霊言蠡勺、職方外紀の十種である。器編は、泰西水法、渾蓋通憲図説、幾何原本、表度説、天問略、簡平儀、同文算指前編・通編、圜容較義、測量法義、勾股義の十種である。『大意書』では、表記に若干の異同があるほか、理編と器編の各二種、計四種の書物が抜け落ちていることが分かる。すなわち、理編の『天主実義』と『職方外紀』、器編の『表度説』と『天問略』である。このうち、『天主実義』は明らかに天主教（キリシタン）に関する書物であり、『職方外紀』も天主教関連の内容を含むことから、最初から省かれていたことが考えられるが、『表度説』と『天問略』に関しては、その理由は明らかでない。(11)

さて、『大意書』では以上に続いて『泰西水法』が取り上げられ内容が説明されるが、「右一種ハ此度初テ渡来リ水法之事而已ヲ譔シ候フ書ニテ邪法教化之文ハ曽テ無御座候」として、「相残テ七種　西学凡　唐景教碑　畸人十篇　二十五言　辯学遺牘　七克　霊言蠡勺　此分ハ天主教之趣ヲ相記シ申候書ニテ御座候ニ付キ大意書ヲ以テ左奉申上候」と記されている。つまり、理編のうち『交友論』は天主教教化の内容が記されていないとして、残りの七種が天主教の内容を含むということから、慎重に吟味して『大意書』で取り上げることにしたというわけである。以下に、『西学凡』から順に『霊言蠡勺』まで、その内容が詳細に説明されている。殊に、『西学凡』はヨーロッパのイエズス会の教育課程を紹介したものであるが、極めて詳細にその内容が説明されている。この

ようにして、七書の内容が説明された後に、以下のような総括的な報告が記されている。（読解しやすいように、句読点を施した。）[12]

右七種ハ天主教ノ趣ヲ記シ申候フ書ニテ御座候。何レノ書中モ自宗ヲ崇尊シ勧善懲悪之儀ヲ厳密ニ申述候而已ニテ、外ニ妖術等ノ儀ヲ記シ申候儀ハ無御座候。尤モ唐景教碑ノ序中ニ法浴水風印持十字ト有之候ヘトモ、修法之儀ハ無御座。又七時礼讃七日一薦ト有之候ヘトモ、讃文供膳之式ハ相見ヘ不申。又畸人十篇ノ内ニ毎朝時目ト心ト天ヲ仰テ上帝我ヲ生ミ我ヲ養ヒ我ヲ教誨スルニ至ルマテノ無量ノ恩徳ヲ籲謝シ、次ニ今日我ヲ祐ケンコトヲ祈テ、必三誓ヲ践ミ妄念スルコト毋ク妄言スルコト毋ク妄行スルコト毋ク、夕ヘニ至レハ又身ヲ俯シ地ニ投シテ、厳自本日刻々処々ニシテ思ヒシ所談セシ所動作セシ所妄ト否与有リヤ否ヤヲ察省シ、即チ功ヲ上帝ニ帰シテ恩祐ヲ叩謝スト有之。又天主台下ニ叩謝スト申ス類間有之候ヘトモ、誦経念呪祭祀供給等之式モ相見ヘ不申。又処々天主経ニ曰クトシテ一二句宛ヲ引用仕リ有之候ヘトモ、皆勧善懲悪ノ語ニテ外ニ事替候儀ハ相見ヘ不申候。併利瑪竇唐国ニ入リ漢学仕リ候間々ニ儒道ヲ知リ仏書ヲ見、機ニ応シテ儒ヲ尊ヒ仏ヲ破シ言フ所理ノ当然ヲ以テシテ、人ヲ自宗ニ思ヒ懐ケ煽動セシメ候フ趣ト奉存上候。

以上の総括文の大半が『畸人十篇』の内容に関することであり、興味深い。先ず、天主に対する感謝や懺悔に関する記述は見えるが、「誦経念呪祭祀供給」など儀式的なことについては記されていない、と述べている。ここでの引用は、『畸人十篇』第八篇「善悪之報在身之後」の文章による。また、天主経（『聖書』）から一、二句ずつを引用している、とある。確かに『畸人十篇』では、第三篇に「聖経曰」が一個所、第四篇に「聖経所謂」が一個所それぞれある。第五篇には「天主聖経曰」、「又曰」、「経曰」と、第八篇には「経曰」、「聖経曰」と見える。

また第三篇と第八篇に「葆禄聖人（聖パウロ）曰」とそれぞれ一個所ある。いずれも『聖書』からの引用である。これらに対しても『大意書』は、いずれも勧善懲悪の内容であり、特に問題はないとの見解を述べている。最終的には、「利瑪竇は中国に入って漢学を修めているうちに、儒道を知り仏書を見て、機に応じては儒教を尊び仏教を論破しており、理の当然を以て論じて、人々が自分たちの教えになびくように煽動している。」と述べている。結論的には邪教宣伝の書と見なしているわけだが、『畸人十篇』に対しては、全体的にはいわば好意的な記述がなされている点が注目される。次節においては、『天学初函大意書』のうち、『畸人十篇』に関する解題の部分を翻刻する。

三　『天学初函大意書』における『畸人十篇』（翻刻）

【凡例】

一、本稿は九州大学附属図書館所蔵の『天学初函大意書』の翻刻である。

一、『天学初函大意書』のうち、『畸人十篇』の部分のみを翻刻した。

一、仮名文字の略表記は、通常の形に改めた。

一、異体字はこれを改め、常用漢字のあるものはこれを用いた。

一、各篇の題は、原漢文に返り点と送り仮名を付しているが、送り仮名を用いて書き下し文の形で表記した。

一、読解しやすいように、句読点を施した。

一　畸人十篇

人寿既過レトモ誤テ猶ヲ有リト為　第一

人ノ世ニ生スルコト、日輪地ニ入ルトキハ、年ト月ト吾寿ト一日ヲ減ス。身日々ニ長スレトモ命日々ニ消ス。智者ハ日ノ大宝タルコトヲ知テ一日一辰空ク棄ルニ忍ヒサル趣ヲ述フ。

人ノ今世ニ於ルハ惟〻僑寓耳　第二

見世ハ人世ニ非ス、禽獣ノ本処ナリ。故ニ禽獣ハ自得有余ニシテ、人ハ不寧不足ナリ。請フ儒ヲ以テコレヲ譬ン。試日ニ士ハ労シテ徒隷ハ逸ス、試畢レハ尊ハ自ラ尊卑ハ自ラ卑ナリ。有司豈徒隷ニ厚フシテ士ニ薄カランヤ。天主ノ人ヲ此世ニ置クハ其心ヲ試テ徳行ノ等ヲ定メントナリ。故ニ此世ハ惟僑寓ニシテ本家室ハ天ニ在リ。宜ク勤メテ本業ヲ創ムヘキノ趣ヲ述フ。

常ニ死候ヲ念ノトキハ行ヲ利シテ祥ヲ為ス　第三

常ニ死候ヲ念テ忘レサルトキハ自然ニ道行ヲ利シテ祥ヲ為ス。不肖者ハ諸醜惰ニ掩ハレテ陽ニハ廉ナレトモ陰カニ貪リ外正ク飾レトモ内ハ邪ヲ醸ズ。過ヲ見テ改メズ、義ヲ見テ肯ハス。始テ天主ノ怒忿威厳ヲ見ルニ及バ、誰ニカ祷ンヤ。自ラ招ク所ノ大刑永悠身ヲ脱レサルノ趣ヲ述フ。

常ニ死候ヲ念フテ死後ノ審ニ備フ　第四

常ニ死候ヲ念ヘハ五大益有リ。一ニハ心ヲ斂シテ身ヲ検シテ身後ノ大凶ヲ脱ル。二ニハ、五欲ノ炎心ニ発ル

トキハ、徳危フシテ彼ノ焼壊ヲ受レトモ此死候ノ念ハ一大湧泉ニシテ、彼熾烟ヲ滅スカ故ニ色欲ヲ徴戒スルヲ最上ノ良薬トス。三ニハ夫レ物ハ我カ有ニ非ス、何ノ恋愛スルニ足ンヤ。四ニハ夫レ倨敖ノ気ハ諸徳ノ毒液ニシテ、敖ヲ養フ者ハ道心固ヨリ敗ル。五ニハ造物ノ主物ヲ造スコトニ各賦スルニ己ヲ愛スルノ心ヲ以テス。然レトモ生死皆天主ノ命テ、聴ク人自ラ死ヲ求ルモ不可、生ヲ求ルモ不可ナリ。又善ク死候ニ備ル者ハ三和ニ在リ。心ヲ立テ聖戒ヲ守リ、天ノ怒ヲ息メテ神寵ヲ致ス、是天ニ和スルナリ。人敖狼ニシテ我ニ讐ストモ、恕宥和睦シテ好クコレヲ待ス、是レ人ニ和スルナリ。善ヲ修ノ志ヲ道体ニ帰シ、非義ヲ離廃シテ惜マス、是レ己ヲ和スルナリ等ノ趣ヲ述フ。

君子ハ希レニ言テ言無ンコトヲ欲ス 第五

夫レ言ハ言フ者ノ自ラ須ツ所ニ非ス、乃チ人ヲシテ我カ意ヲ知ラシムルノミ。人既ニ心ニ通セハ何ソ言フコトヲ用ン。聖人ノ民ヲ教ルハ民自ラ知ルトキハ言ノ功止ム。故ニ民知ラサルトキ始テ言フ。凡ソ雅言ハ約ニシテ用広ク、粋言ハ金錠ニ比ス。微ニシテ賈ヒ重シ。又汚邪巧謗誇ノ五毋、真直益減時ノ五有ノ教アリ。言汚レ毋レハ浄ニ近ツヒテ潔キ者マレニ就ク。邪毋レハ正ニ近ヒテ端キ者コレヲ取ル。巧ミ毋レハ質ニ近ヒテ誠アル者コレヲ尚ブ。謗ルコト毋レハ恕ニ近ヒテ忠アル者コレニ従フ。誇ルコト毋レハ謙ニ近ヒテ敖ル者コレヲ去ル。言真アレハ誕リ無シテ人信ス。直有レハ詭曲無フシテ人悦ヒ依ル。益有レハ窾(ムナシ)キコト無シテ人以テ用ヲ為ス。減ナレハ繁ラズシテ人好テ繹(ツヽ)ク。時ナルトキハ誤ラスシテ人聴クコトヲ願フ。言此五毋無ラシメ此五有ヲ獲セシメハ、是ヲ聞者喜ヒ百タビ聞クトモ猶喜フノ意ヲ述フ。

斎素ノ正旨殺ヲ戒ルニ由ルニ非 第六

斎ニ三旨アリ。是ヲ識ルトキハ益切ニ益〻崇シ。夫レ世ニ固ヨリ今日賢ニシテ先日不肖タラサル者有ルコト少ク、今日道ニ順テ昔日嘗テ道ニ違ハサル者有ルコト少シ。其道ハ天主心ニコレヲ銘シテ聖賢ニ命シテコレヲ版冊ニ布カシム。是ヲ犯ス者ハ罪ヲ天帝ニ得。君子既ニ善ニ遷ルト雖トモ前キニ得タル所ノ罪ニ恬然タランヤ。楽ムトキハ食ヲ貶シ飡ヲ減シテ其殺味ヲ除テ淡素ヲ取ル。凡ソ一身ノ用自ラ粗陋ヲ択テ自ラ苦ミ自ラ責メテ、以テ己カ旧悪及ヒ新罪ヲ贖ヒ、晨夜惶々トシテ天主台下ニ稽顙シテ哀憫涕涙シ、己カ汚レヲ洗ハンコト冀フ。是斎素正旨ノ一ナリ。夫レ徳ノ業タル人類ノ本業ナリ。其説ヲ聞テハ悦テ願ハスト云フコト無シ。但彼私欲ノ発スル所ノ者ハ、義ノ有ル所ニ因ラスシテ、欲ノ楽ム所ニ因ル。古賢ハ餓ヲ甘ンシテ飽クコトヲ求メズ、其身ニ仇スルニ似テ実ハ親ムナリ。是斎素正旨ノ二ナリ。此世ハ苦世ナリ。索翫ス可キ非ス。天主我ヲ此ニ寘クハ務メテ其道ヲ修セシムノミニシテ、此肌膚ヲ奉悦セシムルニ非ス。徳行ノ楽ミハ乃チ霊魂ノ楽ミナリ。我是ヲ以テ天神ト同シ。飲食楽ミハ乃チ身ノ窃愉ナリ。吾是ヲ以テ禽獣ト同シ。仁義ハ人心ヲ明カナラシメ、五味ハ人ヲシテ腐腸セシム。積善ノ楽ミハ、心ニ大利有テ身ニ害無シ。豊膳ノ楽ミハ身心倶ニ傷ラル。此二ツハ更ニ迭ヒニ人心ニ出入シテ同ク住ル可ラズ。是斎素正旨ノ三ナリ等ノ趣ヲ述フ。

自省リミ自責メテ無為ナルヲ尤ケシト為 第七

吾輩ノ功トスルハ俗功ト異ナリ、吾カ図ル所ハ神魂ニ在テ身ニ在ラズ。人ノ体貌ハ形ニ属シテ、壮ニ至リ老ニ至レハ日ニ漸ク衰滅スレトモ、智志ノ神ニ属スル者ハ、壮ニ至リ老ニ至レハ反テ更ニ強確ニシテ、神ヲ徴スルニ足テ殺ス可ラズ死滅スルコト能ハズ。吾レ其常生ニ因テ其常善ヲ謀ルトキハ永安慮リ無シ。其初功ハ毎朝目ト心ト天ヲ仰テ、上帝我ヲ生育教誨スル無量ノ恩徳ヲ謝シ、次ニ今日我ヲ祐ンコトヲ祈テ、妄念妄言

妄行毌ンノ三誓ヲ践ミ、夕ヘニ至レハ又身ヲ俯シ地ニ投シテ、本日刻々処々思談動作セシ所省察シテ功ヲ上帝ニ帰シ、差爽アレハ即チ自ラ痛悔シ軽重ニ拠テ自ラ責罰ヲ行ヒ必改メ絶テ、毎日毎夜是ヲ以テ常トシテ過端消耗セシム。是ハ初功ナリ。初功ニ又初中末ノ三ツ有リ。初テ志ヲ立テ道ヲ行ンニ、其始メ事猶混濁シテ未タ清ムコトヲ得サレハ、惟其大非ヲ戒メ聊カ進テ其非ニ克チ省テ善地ニ至り、乃チ細微ノ過ヲ察ス。譬ハ泉ノ淪濁セシヲ清ムルカ如シ。先ツ其粗石ヲ除キ、水既ニ静カニナラハ小石ヲ視テ是ヲ去ル可シ。既ニ澄メルトキハ、其眇末ノ土砂ノ水底ニ沈居セル者悉ク睹テコレヲ汰ス可シ。此三ツハ諸悪ヲ屏ケ棄ル等ノ趣ヲ述フ。

善悪ノ報ハ身ノ後ニ在リ 第八

夫レ天堂ハ六過無フシテ六福有リ。一ヲ聖城ト謂フ、過無シテ全徳有リ。二ヲ太平域ト謂フ、危懼無シテ恒ニ恬淡タリ。三ヲ楽地ト謂フ、憂苦無シテ永楽ナリ。四ヲ天郷ト謂フ、冀望無シテ皆充満ス。六ヲ寿無彊山ト謂フ、人均ク死セズシテ常ニ生ク。雋徳ノ精内ニ含テ露ハサズ、悪匿ノ本ト心ニ釀シテ洩ラササレハ、人是ヲ知ラズ、天主姑ク容ルシテ報セズ、或ハ姑ク報シテ未タ尽サズ、是レ必来世天ノ主宰明威神鑑按審爽ハサルヲ待ツナリ。天主天堂地獄ヲ造成シテ善悪ノ報ヲ為スコト、本ヨリ伝ヘテ宣令有リ。天堂ノ大事性理ノ上ニ在テハ、人ノ智力洞明スルコト克ハズ。其情ニ達セント欲セハ、天主経典ニ拠ルニ非ンハ是ヲ測ルコト能ハズ。善ヲ修スレハ天堂ニ生シ、悪ヲ作セハ地獄ニ堕ス、是天主ノ法ニシテ、一世ノ善悪報スルニ万世ノ吉凶ヲ以スルコト大旨カクノ如シ等ノ趣ヲ述フ。

妄リニ未来ヲ詢テ自〔ラ〕身凶ヲ速ク 第九

南粤詔陽郡ノ郭姓ナル者、利氏カ門ニ踵テ涕涙頤（オトガヒ）ニ交ヘテ曰ク、来テ師ニ辞ス、再ヒ見ヘシト。利氏怪テ問

ヘハ、将ニ世ヲ去ントスト曰フ。其故ヲ問ヘハ、五年前、高人ノ星命ヲ談スル者我カ為メ算ヲ推シテ今年マテノ事ヲ説キシニ、言々験シ有リ。命終ノ期、今年四月中ニ免レズト曰フ。今月果シテ諸ノ不祥ヲ夢ム。豈徴応ナラスヤ。利氏曰ク、世間ノ虚妄、星家ノ言ト夜夢トニ若クハ無シ。吉ヲ迎ヘ凶ヲ避ルニ道有リ、悪ヲ改メテ善ニ遷ルノミ。汝悪ニ染テ洗フコトヲ思ハズ、善ヲ見テ行フコトヲ図ラズ、僥倖ニ禍ヲ免レテ福ヲ受ントス。星家汝ニ予フトモ、天主鬼神ノ正理必汝ニ予ヘシ。古ノト筮ハ、疑ヲ決スルノミ。今ハ惟僥倖ノミ是求ム。周公ハトヲ重ンセズ。況ヤ星家ニ問テ以テ天主ノ首誡ヲ犯スヲヤ。郭生拝謝シテ曰ク、吾カ命、師実ニ是ヲ再生ス。大教ヲ聞スンバ枉テ自ラ断チ棄ンノミ。今ヨリ以後、児ハ父ヲ得、婦ハ夫ヲ得テ、一家安全ナラン。敢テ依ル所ヲ忘ンヤ。利氏乃チ郭生ヲ引テ天主台下ニ往テ叩謝シテ是ニ丁寧スラク、虚誕ノ浮説ヲ聞クコト勿ク、惟心ヲ正フシテ天主ノ正命ヲ候ヘト。郭生別レテ終ニ恙無ク四年ニシテ又一子ヲ得、八旬ニ及ヘトモ健カニ飯スルコト昔日ニ減セズ等ノ趣ヲ述フ。

富テ貪吝ナレハ貧屢ニ苦ム　第十

富テ貪吝ナル者数輩ヲ挙テ、富テ貧吝ナルハ貧シテ財ニ乏キヲ苦ムニ同シ、貧シテ分ヲ安ンスルハ、富テ楽ムニ同キノ理ヲ徴述ス。

附　西琴曲意八章

万暦二十八年、利瑪竇贄ヲ具シ京師ニ赴テ献上ス。其内ニ西洋ノ楽器雅琴一具有リ。異形ニシテコレヲ撫レハ異音有リ。帝コレヲ奇トシテ楽師ニ因テ問テ曰ク、是ヲ奏スルニハ必本国ノ曲有ン。願ハ是ヲ聞ン。利瑪竇対テ曰ク、他典知ルコト無シ。惟道語数曲ヲ習フノミ。今其大意ヲ訳シテ左ニ陳フ。其本韻ニ随フコト能ハサルハ、

方音異ナレハナリ。　吾レ願クハ上ニ在ン　牧童山ニ遊フ　善ノ計コトハ寿ノ修ナリ　徳ノ勇巧　老テ徳無キヲ悔フ　胸中庸平　肩ニ雙嚢ヲ負フ　命ヲ定メテ四達ス　以上八題曲中之語皆題意之通リニテ外ニ事替リ候フ儀ハ無御座候。尤モ此書万暦三十六年ノ刊ニテ御座候。

〔注〕

(1) 『天主実義』については、拙訳『天主実義』(平凡社「東洋文庫」、二〇〇四) 及び、同書所載の解説、参考文献等を参照。

(2) 『畸人十篇』については、拙稿「『畸人十篇』研究序説」(『哲学年報』第六十五輯、二〇〇六)、「『畸人十篇』の研究—第一篇・第二篇訳注—」(『哲学年報』第六十八輯、二〇〇九)、「『畸人十篇』の研究 (二) —第三篇・第四篇訳注稿—」(『哲学年報』第七十一輯、二〇〇二)、及び平川祐弘『マッテオ・リッチ伝・2』(平凡社「東洋文庫」、一九九七)、ジャック・ベジノ『利瑪竇—天主の僕として生きたマテオ・リッチ』(サンパウロ、二〇〇四)、J・スペンス著、古田島洋介訳『マッテオ・リッチの記憶の宮殿』(平凡社、一九九五) 等を参照。

(3) 川名公平訳『中国キリスト教布教史・一』第一の書・第10章 (岩波書店「大航海時代叢書」第Ⅱ期・8、一九八二) を参照。同書は、リッチが一六〇八年から執筆してヨーロッパに書き送った書である。

(4) 『天学初函』については、方豪「李之藻輯刻天学初函考—李之藻誕生四百年紀年論文」(中国史学叢書『天学初函』所載、台湾学生書局、一九六五) を参照。

(5) 前掲拙稿「『畸人十篇』研究序説」を参照。

(6) 林羅山「排耶蘇」(『羅山文集』巻五十六、『日本思想大系』25「キリシタン書・排耶書」) を参照。

(7) 『日本随筆大成』別巻 (吉川弘文館、一九二八) 所収本の巻十四 (五八二頁) に見える。

(8) 徂徠のこの文章は、国会図書館所蔵の『畸人十篇』江戸写本の巻首に掲げられている。

(9) 村岡典嗣「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」(『芸文』第11巻第3号、一九二〇初出、『新編日本思想史研究』平凡社「東洋文庫」、二〇〇四所収)、海老沢有道『南蛮学党の研究』(創元社、一九五八)、伊藤多三郎「禁書の研究」(「歴史地理」10・11月号、一九三六)、三木正太郎『平田篤胤の研究』(神道史学会、一九六九)、田原嗣郎「『霊の真柱』以降における平田篤胤の思想について」(『日本思想大系』第50巻)、坂本春吉「平田篤胤の復古神道とキリスト教—本教外篇の研究—」(私家版、一九八六)、平川祐弘『マッテオ・リッチ伝・2』(平凡社「東洋文庫」、一九九七) 等を参照。

(10) 大庭脩氏の同書によれば、『天学初函大意書』は両大学本とも「途中明らかに脱落がある」とされる。
(11) 『天学初函』器編の諸書については、安大玉『明末西洋科学東伝史―『天学初函』器編の研究』（知泉書館、二〇〇七）を参照。
(12) 三行目の「毎朝時目ト心ト」から六行目の「恩祐ヲ叩謝ス」までは、原文では原漢文に返り点と送り仮名を付した形であるが、本稿ではそのままに書き下し文の形に直した。

〔附記〕
本稿は、平成二十三年度～二十五年度 科学研究費補助金による基盤研究（C）「『畸人十篇』とその朝鮮・日本における思想的影響に関する研究」（代表 柴田篤）に参加して得られた研究成果の一部である。